

InvestigationReport4

forQUIT30

InvestigationReport4

forQUIT30

三人の潜伏者に定められた三十年の調査期間。三人に課せられたミッションも最後のものとなり、その項目は着実に遂行されていきます。最終プロセスの第一段階はライブ「TM NETWORK 30th 1984～ the beginning of the end」で、第二段階がライブ「TM NETWORK 30th 1984～ QUIT30」で描かれました。そして、続くライブ「TM NETWORK 30th 1984～ QUIT30 HUGE DATA」の中で物語は終幕を迎えます。

TM NETWORKが2012年から展開している物語を確認しておきましょう。表現の方法はステージによって変わってきましたが、全体を貫くラインは明確です。すなわち、TM NETWORKの三人は潜伏者であり、彼らの他にも潜伏者はいる。潜伏者は地球のあちこちにおいて、人間の営みを調査し、地球の外に浮かぶマザーシップに報告するという任務を遂行している。この時代だけでなく、過去のあらゆる時代にも潜伏していた。旗色鮮明ではなく、人類にとって有益な存在だったこともあれば、そうではなかったこともある。誰かの人生を左右することもあれば、誰からも気に留められることなく任務を終えた潜伏者もいます。

地球のあらゆる物事を記録し、報告した潜伏者を描いた物語。潜伏者の視点から地球を見ると、どのように映るのか。どのように記憶し、どのように記録するのか。記憶に留め、記録に残さないものもあるのかもしれませんが。例えば、人々が抱く愛情を記録したとしても、期せずして自らが誰かに抱いた恋心は記憶の中だけに留めておいた。TM NETWORKが歌ういくつかのラブソングは、記録に残らない潜伏者の記憶のひとつを表わしたものだ。そんなサイドストーリーがあってもおかしくはありません。いくらかは想像の範疇に入りますが、ステージで披露される曲をつなぎ合わせてみると物語の輪郭が浮かび上がります。

\*\*\*

「TM NETWORK 30th 1984～ QUIT30」は2014年10月の横須賀公演に始まり、各地を巡った後、2015年1月の福島公演で終了しました。ライブの軸を成しているのは組曲「QUIT30」です。ツアー開始と同時にリリースされたオリジナル・アルバム『QUIT30』の核でもあります。この組曲を中心にしてライブを貫くストーリーが描かれ、ステージ演出が決められました。巨大なLEDスクリーンが映し出す映像の数々が物語を綴り、印象的なメッセージを残します。ただ、メタメッセージとして、謎に翻弄されたり謎解きに躍起になるのではなく、少しだけ想像を巡らせて謎そのものを楽しんでもらいたい、という意図を感じました。

組曲「QUIT30」は八つのトラックで構成されていますが、ライブでは五つに分割されていることが分かります。サウンドに連続性のあるトラックが続けて演奏され、その前後には他の曲が配されます。五つのパートの前または後ろには、映像によるストーリーテリングが行なわれます。それぞれのピースを集めてつなぎ合わせます。ライブでは幾多の風景や台詞を追うだけで精一杯でしたが、記録の分析を丹念に行なうことで、見えなかったものが目に入ってきます。即時的な処理が追いつかない情報、そして近年の莫大な量の情報のことを、"big data" よりも大量のデータという意味で、小室さんは「HUGE DATA」と呼びました。

HUGE DATAに囲まれて何をすべきか分からない人間の群れ。それでも丁寧にデータを扱い、で

きる限り分析、解読、処理すれば、有益なものが得られる。それは情報に対する強者と弱者を生み出すことにもなりますが、良くも悪くも人間の営みに含まれるのかもしれませんが。情報を独占する人間もいれば、解放、共有して連携する人間もいる。データが増えれば、データをやりとりする人々も増え、つながりが増え、ネットワークは離合集散を繰り返します。地球上の人々は、前代未聞の情報量に直面したとき、何を考え、どのように振る舞うか。データは増殖を続け、潜伏者は記録を続けます。

## QUIT30 PART1: Birth

---

「SEVEN DAYS WAR」のメロディが会場に響き渡り、物語の幕開けを告げます。巨大なLEDパネルで組み上げられたスクリーンには、どこかの港が映ります。黒いスーツを着た女性がゆっくりと歩を進めます。映像は移り変わり、どこかの家の窓辺、明かりの漏れる夜の窓、車が行き交う道路が映ります。映像はぱっと明るくなり、草木の生い茂る池が映し出されます。都市を少し離ればどこにでもあるであろう、長閑な風景。

やがてカメラは煉瓦造りの建物をとらえます。男性が歩いてきて、手にした袋からバトンを取り出し、それを放り投げます。彼もまた潜伏者なののでしょうか。そして、ウツ（の姿をした潜伏者）がやってきて、地面に転がるバトンを拾い上げます。バトンを手にして、しばし眺め、何かを考え込むような表情をわずかに見せたあと、彼は歩き去ります。

サウンドは2014年の音に作り変えられています。シンセサイザーが奏でるメロディは緩やかに、穏やかに流れ、それを支えるベースやスネアの音とともに、静かに観客を包み込む。このような、オリジナルを素材にした音の改造を、TM NETWORKではリプロダクションと呼びます。過去の曲はリプロダクションによって新たな音をまとい、新たな印象を聴き手に与えます。

女性の声が聞こえます。彼女は「キャロル・ミュー・ダグラス」と名乗ります。そして、この物語のガイドを務める、と言います。スクリーンが映すのは「TM NETWORK 30th 1984～ the beginning of the end」のワンシーン。1988年の「キャロル」の衣装を着た少女が軽やかにステップを踏み、ふわりと踊ります。それは三人の潜伏者がマザーシップで生成していた、少女の姿をした生命体であり、バトンとともにどこかに消えました。

ひとつの仮説を立ててみます。「TM NETWORK 30th 1984～ the beginning of the end」のキャロルと、「TM NETWORK 30th 1984～ QUIT30」のキャロルは、別の存在である。さらに言えば、1988年の「CAROL」に登場するキャロルもまた別のキャラクターです。TM NETWORKの作品に出てきたキャロルはすべて、「キャロル」という役割を与えられた別個の存在だと言えます。

「キャロル」という役割は、物語によって変わります。物語の主人公になったり、過去の記憶を掘り起こすための助演を務めたり、物語のテーマを内包する舞台装置になったりする。仮面を変えるように役割をシフトしていきます。そして「QUIT30」を軸にしたこの物語では、キャロルは観客を導く案内役です。情報があふれ返るライブの中で、彼女の存在が物語と観客をつなげる旗印となります。

鳴り響く爆発音。立ち込めるスモーク。光がステージ後方から差し込み、ふたつのシルエットが浮かび上がります。そこにはいたのは小室さんと木根さんです。並んでしばし前に歩くと、小室さんは観客席から見て左側、木根さんは右側に歩き、それぞれの位置に立ちます。水が流れるような音が会場を包み、スクリーンには幾何学模様で描いた地球が映し出されます。

ハイハットを小刻みに叩く音がして、ピアノの旋律が流れ出します。ウツはステージ後方の中央にある階段に腰を下ろし、組曲「QUIT30」の序曲である「Birth」を歌い始めます。音も歌も抑制され、暗雲が垂れ込めるようにして世界が閉じていきますが、それは同時に音楽的なエネルギー

一を充満させます。そして、小室さんがいくつもの白鍵を一気に鳴らす音を合図に、あらゆる音が一気に弾け飛ぶ。殻を割って新たな生命が飛び出すように、立ち込めた雲の切れ目から光が差し込むように、音が開放されます。

経済的发展を続ける、アジアのある都市。そこに生きる人々の姿が切り取られ、スクリーンに浮かび上がります。この中にも潜伏者はいるのでしょうか。幾何学模様の地球が回ります。発展と貧困が混在したカオスの中で生きる人々は何を思うのか。そうした都市をビジネスの市場として見て、その価値を見極めんとしている人々は何を思うのか。潜伏者は都市の中に潜み、人々の間に潜みます。けれども、視点はずっとずっと上にあり、人々の営みを俯瞰します。「Birth」のテーマ、そして組曲「QUIT30」のメイン・テーマは「俯瞰」です。

## WILD HEAVEN/TIME TO COUNT DOWN

---

地を這うようなベースの音が響く中、ステージは青く暗い光に染まります。すると何本もの白い光のラインがステージを照らし、それらは中央に立つウツに集束します。青くて重厚な雰囲気から一転して音も光も輝きを放ち始め、エレクトロ系ロック・サウンドに満たされます。曲は「WILD HEAVEN」です。ソフト・シンセでつくった粘り気のある音が端々で鳴る中、木根さんのコーラスが殊の外、大きく響きます。

木根さんのコーラスが強調されるのは珍しいことではありません。2012年から始まったプロジェクトでは、できる限り三人の声でコーラスをおこなっています。TM NETWORKを構成する幾多のトライアングルのひとつですね。木根さんは謙遜していますが、三人の声を混ぜるときに欠かせない、つなぎの役割を果たしています。R&Bやジャズのような、いわゆるソウルフルなコーラスではないけれど、TM NETWORKの音やメロディに合ったハーモニーをデザインするために木根さんの声は欠かせません。

「WILD HEAVEN」はロックの雰囲気を持ちつつ、ハウス・ミュージックのテイストもある曲です。1991年にシングルとしてリリースされ、1993年のリミックス・アルバムにはハードコア・テクノの要素を取り込んだextended mixが収録されました。アウトロと言うにはあまりにも長大な、リミックスの後半がほとんど別物のトラックであり、当時の小室さんのスタイルを反映していました。多少の距離はあるものの、その系譜に連なるのがtrfでした。四つ打ちと硬い音のシンセサイザーで攻める系統のダンス・ミュージックと親和性が高い曲と言えます。

光が小室さんを照らし、早弾きのピアノの音が会場に響きます。ピアノの音だけで観客をアジテートするメロディ。やがて、ピアノの音に導かれるように、エレクトロニック・サウンドが染み出して会場を支配していきます。四つ打ちがかぶさり、ギターが咆えます。「TIME TO COUNT DOWN」のオリジナルは、ハード・ロック系の音でまとめられたアルバム『RHYTHM RED』の中核になっており、とてもワイルドで力強い曲です。「ドラマー殺し」の異名を持ち、ライブでは演奏する方も大変ながら、聴く方も相当エネルギーを必要とします。2004年のアルバム『NETWORK -Easy Listening-』では、トランス系の音でリメイクされました。今回のライブではロックから大きくエレクトロに寄りました。

EDMに傾倒した小室さんが2014年に「TIME TO COUNT DOWN」を選び、タイムリーな音に作り変え、構造にまで手を加えます。インターラードではオリジナルにない展開を見せ、EDM系サウンドによる盛り上がりを見せます。シンセサイザーで重ねるフレーズは小室さんらしさが炸裂します。スクリーンには無数のアルファベットや数字が乱舞し、トンネルを進むかのごとく、文字が流れては消えていきます。映像が生み出すスピード感が曲の持つスピードに合致し、体感速度は増幅します。同じエレクトロ系であっても、2004年の減算的なサウンドメイクとは異なり、ある程度のボリュームを持ち、立体的に重ねていくのが2014年のスタイルですね。層を成すサウンドの情報量はとで多く、これもまたHUGE DATA（大量の情報）と言えます。

アウトロに突入する瞬間、ウツが右腕を上げるとすべてのスイッチをオフにしたように音が消えます。そして身体を右に向けながら腕を振り下ろすと、再びスイッチがオンになる。このライ

ブだけにアレンジされたエレクトロ系のスピーディーな音が走り始めます。フロントマンとしてのウツの所作は、こういったポイントで輝きます。ミュージカルを経験したり、演劇の要素を取り入れたソロ・ライブを披露したりしたことも活きていると思います。ステージで映える所作というのは、決してオーバーアクションというわけではなく、ひとつひとつの動作をきちんと止めたり最適な間を作り出したりすることにあります。小室さんが作り出したサウンドや間を、ウツが視覚的にコンダクトする。それによってライブがより躍動して、観客の興奮をアンプリファイします。

## QUIT30 PART2: The Beginning Of The End/Mist

---

赤い光がぐるぐると回り続ける中で、シンセサイザーとギターのアンサンブルが現実感を失わせ、観客はどこか別の世界に吸い込まれます。組曲「QUIT30」を構成する曲のひとつである「The Beginning Of The End」が、ステージを異空間に染め上げます。スクリーンには、夜道で車の後部座席に乗り込む「キャロル」が映し出されます。彼女はどこに向かうのでしょうか。何かから逃げているわけでもなく、あるいは急いで向かっている様子もありません。彼女を乗せた車はゆっくりと走り始め、夜の道を静かに駆け抜けます。

「The Beginning Of The End」はシンセサイザーとエレクトリック・ギターがそれぞれに生み出し、リフレインするフレーズが軸になっています。YesやEmerson, Lake & Palmerをイメージさせる網の目の細かいサウンドは、いくつもの円を描きながら、いつの間にか螺旋の軌跡を残して進みます。ライブでは、侵入者の存在を告げるアラートのようにも聞こえるアルペジエーターを重ね、さらに木根さんが職人的に繰り返すアコースティック・ギターのストロークが混ざります。音の交錯。音の乱舞。音の集積。音の螺旋は終わりの予感すら見せず、どこまでも続きます。

いくつもの赤くて丸みを帯びたものが細いチューブの中を駆け巡る。人間の血管の中をイメージしてデフォルメしたアニメーションがスクリーンに映し出されます。人間の身体に張り巡らされた血管を、赤血球を始めとした無数の細胞が流れます。血管の中を進んでいくと、気づけば周りには何百何千という言葉では足りないほどの数の星が広がり、やがてひとつの銀河を俯瞰します。その大きさは想像を超えており、人間のサイズなど比較にもなりません。銀河の中に含まれる小さな小さな点のひとつが人間である、ということは言えそうです。人間の体内というミクロの極致から、銀河というマクロの極致へ。視点がダイナミックに移ろいます。

最後は母の胎内で眠る胎児を描いたグラフィックが表示され、そして霞むように消えます。

「The Beginning Of The End」というタイトルは、もともとはTM NETWORKの30周年プロジェクトの終わりを指す言葉と捉えていましたが、人間を示す言葉であると考えてみましょう。生命が宿るとは「死に向かってスタートを切ることである」と言えます。それはすなわち終わりの始まりである、と。「終わること」は結果であり、「終わらせること」は目的です。では、死とは「終わること」でしょうか、「終わらせること」でしょうか。生き続けた末に訪れる結果か、いくつかのマイルストーンを通過してたどり着く目的地か。

ループする音の連鎖が "Love" という言葉によって断ち切られると、目の前の世界が一気に変容し、組曲の続きである「Mist」に移ります。「The Beginning Of The End」で淡々と紡がれる言葉から一転して、「Mist」では叙情的な雰囲気が強まります。エレクトリック・ギターがかき鳴らす音は、幾多の人々が溜め込んでいる感情を吐き出させるようです。ウツのボーカルも熱を帯びて、曲が生み出す昂りに拍車を掛けます。

霧に包まれたとき、ホワイトアウトする世界の中で、はっきり見えるのは自分の周りだけです。晴れ渡っているときほど遠くのものを見ようとしますが、そうすると注意のリソースは分散され、手の届くところにあるものへの注意は相対的に減じる。けれども、霧の中で遠くが見えなければ、頼れるのはすぐ近くにあるものです。人と人の関係においても同じことが言えるのかも

しれません。その体温を感じることで、霧の中でどちらに向かうべきか分からなくなりながらも、まずは自分たちの存在を改めて確認する。茫漠たる海の真ん中で錨を下ろすように。

「Mist」の歌詞はアダムとイヴから始まる人間の営みの変遷を歌い、HUGE DATA（大量の情報）に呑み込まれながら生きる姿を描き、どこにでもいるであろう恋人たちの姿を綴ります。世界も人間も先へ先へ進むようであり、ループにループを重ねて、結局は元の場所に戻ってきているのでしょうか。曲が最後を迎えると、大きく広がった視野が急に収束して一点に焦点を絞ります。目の前のピースフルな光景をそっと見守るように、木根さんの爪弾くアコースティック・ギターが柔らかくて静かな音を残します。音は暗闇の中に吸い込まれます。

ベースを中心とした音が群れをなし、夜の間隙からにじみ出て物語を覆います。シートに背を預けた「キャロル」は潜伏者の役割について語り始め、過ぎ去る夜景に目を向けながら淡々と言葉を継ぎます。三十年の任期の中で、三人の潜伏者は地球のあちこちに散らばったピースを集めてきました。それらを組み合わせ、つなぎ合わせることで浮かび、見えてくるものを、彼女は「真実」と表現します。「真実」とは具体的に何を指すのでしょうか。彼女は多くを語らず、いくつかの欠片だけを残して、言葉を畳みます。音は再び夜の闇に溶けて消えていきます。

## Alive/君がいてよかった

---

三つの三角形がくるくると回りながら互いに近づき、やがて重なり、遠ざかり、消えます。流れる景色は夜の高速道路。道路を照らす外灯やテールライトが遠くに見えますが、それらは小さな光の粒としてきらめき、夜空を埋める星々を思わせます。シンセサイザーの音とベースの音がきれいな層をなし、心地好い夜風のように観客を包み込みます。やがてキックの音が加わり、シンセサイザーがスパーシーな音を刻みます。

「Alive」という曲は、アルバム『QUIT30』の先頭に収録されています。シングルとして十分に成立するポップさを備えつつも、聴き手を突き放すクールさも内包した曲です。1980年代のTM NETWORK、1990年代のポップス（とりわけウツのソロ曲）を感じさせながらも、端々に光る音は2010年代のもの。小室さんはEDM系だけでなく、ポップスにもソフト・シンセの音を積極的に混ぜます。たとえば、ワブル・ベースの音を短く刻んで貼り付けることで、軽やかな曲も角度を少し変えれば深みのある音を楽しむことができます。

日進月歩の勢いで更新されるソフト・シンセの音を常にチェックし、自分のサウンドに取り込む。それだけその音に魅せられているということですが、多くのリスナーの耳に届くジャンルでこそ、多彩な音をプレゼンテーションしたいのでしょう。琴線に触れた音は早く世に出して、少しでも多くの人に聴いてもらって、リアクションを見てみたくなる。TM NETWORKとして活動していた1980年代も、1990年代のトップランナー時代も、そしてトランスやEDMなどのエレクトロに傾倒する21世紀も、表現者としての根幹は変わりません。

Virus Indigo 2 Redbackというアナログ・シンセサイザーがソフト・シンセの音を貫くように響き、強力なプレゼンスを見せます。シンセサイザーに細い音のイメージがあるとすれば、それを粉々に打ち砕く音を出します。ソフト・シンセがメインになるにつれて使われる機会は減りましたが、このツアーで面目躍如と言うべきか、独特の太いくて力強い音を前面に押し出すシーンが見受けられました。ハード・シンセを必要なもののみに絞り込む中で、そのうちの一台として揺るがぬポジションをキープしています。他のシンセサイザーでは出せないオリジナリティを持った音であり、やはりTM NETWORKのサウンドには欠かせません。

「Alive」の詞は、ばらばらになって離れて、それでもつながりをつくろうとする人々のことを綴ります。日常的な言葉によるメタファーでリアリスティックな世界を浮かび上がらせます。組曲「QUIT30」の外に位置する曲ですが、組曲のテーマでもあるHUGE DATA（大量の情報）に呑み込まれて翻弄されることを歌います。それは、続いて披露される「君がいてよかった」に通じるものがあります。「君がいてよかった」の中で人々を分断するものは自然の力や天災であり、それでも生きる人々の姿を刻み込みます。そうした文脈を念頭に置くと、シンプルな曲名も重みを感じます。足枷という意味の重みではなく、そこに立ち続けるための支え。

「君がいてよかった」はシングル「I am」、アルバム『QUIT30』に収録されています。シングルではシンセサイザーやベースの音が曲を引っ張る一方で、アルバムではギターが強調されていました。ライブでもエレクトリック・ギターが強調されています。加えて、小室さんの弾くピアノの音が印象に残ります。音が硬くて跳ねて弾ける、ロック系のピアノですね。とて

もタフだし、スピード感も増します。ギターの音と相俟って、ワイルドなロックの表情を見せるアレンジです。

曲はフルコーラスを演奏する前に収束し、ウツが、続いて小室さんがステージの袖に消えます。代わって、アコースティック・ギターを抱えた木根さんが前に進み、ステージの縁に腰掛けます。おもむろにギターを爪弾き、軽やかに舞うメロディを奏でます。ひとしきり弾いた後、一呼吸おいて「LOOKING AT YOU」を弾き語りで披露します。木根さんがメロディを書き、TM NETWORKでは初めてリードボーカルをとった曲です。TM NETWORKにおける木根さんの大きな役割はバラードを書くことでしたが、「LOOKING AT YOU」も実に彼らしい、優しくて美しく、そして切なげな曲です。

ワンコーラスを歌うと木根さんはアコースティック・ギターをエレクトリック・ギターに持ち替え、ディストーション・ノイズを鳴らします。木根さんが合図を送ると、ショルダーキーボード（KORG社のRK-100S）を下げた小室さんが入ってきて、セッションが始まります。木根さんが弾きます、アドリブで弾きます、いつもより多めに弾いています。小室さんはギター音を呼び出して、ロック・ギタリストさながらのフレーズを鍵盤で奏でます。二人とも相手の音に対抗するように自らの音を鳴らし、途中で「GIRLFRIEND」のフレーズも飛び出します。

ギターの音が交差するセッションの終盤ではリズム・セクションの音が戻ってきます。二人の音が醸すギター・ロック的な雰囲気はさらに強まります。ステージに再び姿を見せたウツは、演奏する二人を示しながら観客を煽ります。そしてウツの歌を合図にして、違う曲やセッションを挟み込んだ長いインターラードが終わり、「君がいてよかった」が再開されます。そのまま曲の最後まで駆け抜けます。

## Always be there/STILL LOVE HER

---

木根さんと小室さんのハーモニーが響き渡り、会場を満たしていた熱がゆっくりと下がります。三人の声が重なる「Always be there」は、もともと小室さんが国連のプロジェクトのために書き、自身のイベントで披露した曲です。ウツのボーカルや三人のコーラスを録音して、TM NETWORKの新曲として『QUIT30』に収録されました。

シンプルなりズムが「Always be there」の特徴であり、それが魅力となっています。アルバムでもライブでも、リズムのシンプルさが際立ちます。コンガとボンゴの音は、ゆったりとしたテンポの中でメロディの優しさを引き立てます。曲の途中まではパーカッションがリズムを構成し、終盤になるとスネアやキックの音に切り替わります。パーカッションの音に乗せたサビのメロディや歌詞は、ドラムの力強い音に支えられると、異なる印象に変わります。同じメロディや歌詞であっても、ボトムを支える音の違いによって印象が変わる。優しく語りかける雰囲気から、次第に、気持ちをまっすぐ伝えようと言葉に力を込める感じに変わります。

「Always be there」の歌詞は地球を俯瞰している、とされます。しかし、ぐっとズームインして地上に降り立ってみると、たったひとりに向けたパーソナルな言葉と捉えることもできます。メタファーを介してマクロやミクロの視点で人間を形而上学的に描くのは組曲「QUIT30」が担うとすれば、この曲では、より具体的な生身の人間の姿、等身大の関係性を歌っています。

同じ時間を過ごすことが当たり前になればなるほど、重みを感じなくなるものですが、ふとした瞬間に、それがいかに大事かを思う。二人でいると明日が来ると思えることが嬉しい、と語る歌詞からは、切実で、素朴で、繊細な思いを感じます。ともに過ごした時間は錨のような存在なのかもしれません。何事もなく船は進み続ければいい。けれども、どこに向かえばいいか、どうすればいいか分からなくなったとき、錨を下ろす。錨が行き先を決めてくれるわけではないけれど、一度その場に停まり、考える時間を与えてくれます。「明日が来ると思えるだけで嬉しくなる」というのは、いろいろなものに惑わされ、大事なものを見失いつつあるときに、自分を取り戻すための錨なのだろう、と。

続いて披露された「STILL LOVE HER」からも、リアルな二人の関係が浮かび上がります。「失われた風景」というサブタイトルが示すように、この曲は大事なものから離れた人間の姿を描きます。もともとは、ロンドンで制作されたオリジナル・アルバム『CAROL -A DAY IN A GIRL'S LIFE 1991-』のラストを飾り、彼の地の風景を綴った曲です。

特定のストーリーを含む曲ではありませんが、歌詞に出てくる具体的なものやそれらが強調する切ない気持ちは、文脈を与えることで、血肉を備えた人間の姿をイメージさせます。気持ちを告げられなかった男性の独白。片思いではなく、ずっと一緒にいようと言えなかったことを引きずっている。彼はなぜロンドンに来たのでしょうか。目の前に広がる古都の街並みに、数々の記憶がよみがえり、同時に諦めにも似た後悔が渦巻く。思考はぐるぐると同じところを回ります。

今回のライブでは、木根さんが十二弦のアコースティック・ギターを弾きます。サビとそれ以外で弾くネックを分けていました。また、多くの場面でコーラスも重ね、さらに間奏ではハーモ

ニカを吹いてソロを披露します。マルチプレイヤーとして輝く木根さんを観ることができます。時期によって木根さんが担う役割は変わりますが、重要性は変わりません。レコード会社の方針でTM NETWORKは途中からウツと小室さんだけになる可能性もあったようですが、そうならなくて本当に良かった。

とはいえ、木根さんも自分の役割に葛藤したこともあったようで、試行錯誤を重ねてTM NETWORKにおけるポジションを確立しました。バラードを書き、アコースティック・ギターを弾き、ハーモニカを吹く。かつてはパントマイムもやったし、宙吊りで空も飛んだ。ベースも弾いたし、小説も書いた。コンセプトが変わるTM NETWORKのプロジェクトにおいて、さまざまな役割を担いました。時に縁の下の力持ちとなって支え、時にコミックリリーフとして場を和ませる。

木根さんがいなかったら、TM NETWORKはどうなっていたのでしょうか？ それは想像するには難しいテーマです。木根さんはTM NETWORKの機能を十分に発揮させるための不可欠な存在であり、だからこそTM NETWORKはスムーズに動きます。三十年経った今でもその重要性を強く感じるし、三角形だからTM NETWORKはTM NETWORKだったのだとすることができます。アルバムを聴けば、ライブを観れば、木根さんが果たす役割を端々に見て取ることができます。

「STILL LOVE HER」の間奏では、ハーモニカを吹く木根さんを小室さんとウツが取り囲み、三人が集まっている様子が背後のスクリーンに映し出されます。小室さんはキーボードに囲まれた定位置から外に出て、コーラスに参加しながらショルダーキーボードを弾き、間奏で木根さんに近づきます。三人が同じ場所に立っているのは、登場や退場のシーンを除けば、けっこう珍しいことです。二人ずつというケースはもちろんありますが、三人が固まることはほとんどない。しかも、木根さんの周りに集まるパターンは...初めてかもしれません。三人の密な関係が表出した瞬間を目の当たりにしました。

## QUIT30 PART3: Glow

---

ひとりの女性がアパートメントの窓から顔を出し、外を見回しています。部屋を出て階段を下り、ストリートに出ると、彼女はタクシーに乗り込みます。彼女も固有のIDを持った潜伏者です。大都市の中に潜み、調査を続けています。宇宙に浮かぶ母船を支配しているコントロール・タワーのようなものは、潜伏者がどこにいて何を調査しているのか、すべて把握しているようです。木根さん（の姿をした潜伏者）が、別の潜伏者の行動を記録します。それは監視ではなく、報告書の一部となるデータの生成です。

「キャロル」が再び語り始めます。潜伏者はさまざまな姿で地球のどこかにいて、そして今も存在している。歴史上の人物ですら潜伏者だった可能性があることについて、彼女は否定しません。潜伏者は必ずしも善悪二元論で語れるような正義の味方ではない。人間にとっては負の歴史であったとしても、潜伏者は報告書に記録します。人間にとって潜伏者は敵なのか、味方なのか。彼女は表情を少し変えたり、言葉に含みを持たせたりしながら、潜伏者の立ち位置について語ります。

インドの民族音楽を思わせる、弦をはじくような音が流れ出て、聴く人の心に小さな波を立てます。TM NETWORKは組曲「QUIT30」の中間に位置する「Glow」を演奏します。ソフト・シンセに重ねるVirus TI PolarとVirus Indigo 2 Redbackの音が、小さな波を大きい波へと変えていきます。重く、絡みつくような音がステージを、そして観客の記憶を支配します。組曲はパートを移ろうたびに表情を変え、音も言葉も異なる印象で観客を包みます。

歌詞に出てくるのは、家を離れて遠くの海を航海する船乗りです。ぼんやりと浮かぶ光に何を思うのでしょうか。家族で囲む灯りか、目指していた大陸の存在を示す灯台か。茫漠とした海原は、よく人生に喩えられます。いつ終わるとも知れぬ航海、荒れる海面、太陽や星の動きだけを頼りに進む海の道、人間のような存在などたやすく呑み込む嵐。

映像は大都市を空から捉えます。ビルが建ち並び、その間を車が行き交う。人間も歩いているはずですが、その姿を捕らえることはできません。母船は潜伏者の場所を示します。この物語を見届けている観客に向けて語られた、先ほどの「キャロル」の言葉が巻き戻されます。あなたたちの家族や友人が、実は潜伏者なのかもしれない、と。彼女の言葉の先に想像の範囲を広げると、さらなる可能性に思い至ります。観客は常に物語の外にいるとは限りません。さて、潜伏者はどこにいますのでしょうか。

TM NETWORKが奏でる音は、海の持つ大きなうねりのようなものを表現するかのようになり、ダイナミックになっていきます。音が音を絡め取って膨らみ、波はうねり、やがて静かになり始め、凧となります。遠くに見えていた光は、いつの間にか見えなくなっています。その光から遠ざかったのか、光が消えたのか、それとも最初からそのような光は存在していなかったのか。

組曲「QUIT30」の中から新たな音が芽吹くような、そんな音の切り換わり。ソフト・シンセで作られた音がステージを観客席を、そして会場全体を覆います。光が解放され、「I am」のイントロが飛び出します。「I am」が初めて披露されたのは、2012年のライブ「TM NETWORK CONCERT -Incubation Period-」です。それ以降、すべてのライブにおいて、セット・リストの要として機能しています。

2013年以降のライブでは、2013年に発表されたリミックスを基本にしたアレンジで演奏されています。ライブのたびに細部が変化しており、イントロがエレクトロに寄ったり、間奏でソフト・シンセの音を押し出したりしてきました。今回のライブで演奏された「I am」について特筆すべきは、オリジナル・ミックスで使われたギター・ソロが再現されていることでしょう。Limp Bizkitに在籍したこともあるマイク・スミスが弾いたフレーズです。メロディ・ラインがとても心地好くて、その後に来るコーラス・パートに気持ちよくつないでくれます。

「I am」では、三人がマイクに向かって歌う姿が印象に残ります。重なる三人の声。こうして彼らが声を重ねる姿を見ると、TM NETWORKを象徴する曲であると強く感じます。繰り返される♪Yes I am Yes I am Yes I am a human♪のフレーズは、物語を綴るストーリーテリングの役割を果たしつつ、ともに歌うことでステージと観客席をつなぎます。それはまるで、人と人をつなぐバトンのようです。ネットワークの中を飛び回り、点と点を結ぶ。「I am」というシグナルがトリガーとなって、TM NETWORKというネットワークが活性化し、記憶も記録も、そして関わるすべての人々をつないできました。アクシデントに見舞われたり、ストーリーの修正があったりする中でも、「I am」は2012年に再び走り始めたTM NETWORKというプロジェクトを貫く軸であり続けました。

「I am」の最後の音を継ぐようにして新たな音が重なり、混ざり、そしてまた新たな音にシフトします。ステージでは小室さんがひとり、光の中でソフト・シンセの画面を映したパネルと向き合います。これまで、アプリケーションの画面を映したのはMacでしたが、今回からはアクリル板のようなものを設置して、床に置いたプロジェクターから画面を投影しています。遠目にはモニターがあるとは分からず、画面がホログラムのように宙に浮いていました。

YAMAHA社のMOTIF XF6をの鍵盤を弾いてソフト・シンセの音を出し、ソフトウェアをマウスで操作して調整します。ソフト・シンセをステージに持ち込んだことで、音を生み出すプロセスを可視化しましたが、これもまた「魅せる鍵盤奏者」たる小室さんのパフォーマンスのひとつです。音を選び、重ね、省き、混ぜ、馴染ませます。ソフト・シンセだけでなく、Virus TI Polar、Virus Indigo 2 Redback、Nord Lead 3といったハード・シンセの音を加えて、その場所、その時間だけのサウンドを構築していきます。

やがて、音は「GET WILD」に移行していきます。この曲はライブを重ねる度に変化しますが、イントロ、Bメロ、間奏、アウトロと、必ずどこかのパーツが交換され、新たな姿に変わります。変わり続ける宿命を背負った曲です。1987年のリリース以降、数々のリミックスやライブ・アレンジが披露されました。シンセサイザーを使った小室さんのパフォーマンスと連動することもあ

ります。そして大きな転換点として2013年が挙げられます。この年から「GET WILD」はEDMの道をひた走ります。

今回のライブではイントロが大きく変わり、スピード感が一段と増します。と、不意に音が変わり、光とカメラが別の場所を捕らえます。鳴り響くのは、シャープなアコースティック・ギターのカッティング。すべての観客の視線と驚きを集めた木根さんが、アコースティック・ギターを激しくかき鳴らします。その熱に呼応するように、前回のツアー「TM NETWORK 30th 1984～the beginning of the end」で組み込んだフレーズが飛び出します。小室さんがコントロールするソフト・シンセの音も激しさを増していき、二人のプレイが生み出す音が火花を散らします。アコースティック・ギターとエレクトロニック・サウンドの交錯はAVICIIを思わせます。

一瞬のエア・ポケットを抜け、響き渡るのはオリジナルの「GET WILD」のイントロです。おなじみのフレーズが観客席をアジテートします。歌が始まってからも、「GET WILD」の変化は随所に感じられます。Bメロにおいてリズムの間隔が空き、シンセサイザーの音が強調されるようになったのは2013年からです。最初はダブステップなどで使われるワブル・ベースがサビへの追い風として機能しましたが、今回のライブではストリングス系の音に変わり、よりドラマチックな雰囲気漂わせます。

ここで体験した「GET WILD」の変化は最終型ではありません。この時は予想もしなかった変化が未来で待ち受けています。「小室さんのことだ、次もきっと変えてくるだろう」と思うのはTM NETWORKを聴いていると日常茶飯事です。半ば邪推のような推測を立てていても、具体的な音は想像の範疇にはありません。どれだけ予測を積み上げていたとしても、実際の音が目の前に現われたときには、驚きと興奮をもって迎えられることになります。予測は裏切られ、時には予測の遥か上に行く。2014年型の「GET WILD」はこのツアーで完成しましたが、時計の針が少し進んだ近い未来では、予測不可能のパーツを組み込んだ2015年型の「GET WILD」が登場するのです。

## QUIT30 PART4: Loop Of The Life/Entrance Of The Earth

---

夜を通り抜け、「キャロル」が姿を見せたのは昼下がりの港です。彼女は黒いスーツに身を包み、海と陸地を隔てる柵に腰かけて独白します。語るのは三人の潜伏者についてです。彼らはそのミッションを終える予定だった。ところが、潜伏者のひとりが行動を起こした。任期が延びることになったのか、予定通りに任務を終えるのか、あるいは新たなミッションが始まろうとしているのか。形の定まらない未来を行間から読み取ることは難しそうです。それでも、物語に組み込まれた時計の針は動き続けます。

ゆったりと海面が上下するようなベースの音に包まれます。ベースの音だけで曲の雰囲気は伝わらないといけない、とは小室さんが語っていたことです。「キャロル」が語る場面での音は、背景に溶け込みながら、それでいてTM NETWORKらしさを感じられます。もう少し言葉を足すなら、TM NETWORKに合った音でつくる小室さんのインストゥルメンタル、という感じでしょうか。ベースの音だけで、TM NETWORKの文脈にぴたりとはまると思えます。

場面は転換します。聴き手の身体をぐるぐると縛るように、エレクトロニック・サウンドがループする。回り回る音は生命の始まりと終わりと、そしてまた始まりを描きます。組曲「QUIT30」の一部である「Loop Of The Life」と題したパートが演奏されます。ベーシックとなる音に、小室さんがソフト・シンセから呼び出したピアノの音を重ねます。その音は一際大きく響き、それはライブの終わり、すなわち物語の終わりに向けて踏み込むアクセルのようです。

小室さん（の姿をした潜伏者）が降り立ったのは、東南アジアにある大都市です。先進国に追いつかんと発展に発展を重ねる熱気は、前世紀から漂うプリミティブな空気と混ざり合います。洗練と伝統、統制と混沌が危ういバランスで拮抗する。スマートな都市計画を元に設計された街並みも、コントロールされたエリアから一步外に出れば、大きく発展する前の原風景が広がります。

「Loop Of The Life」のアウトロから音は鎖のようにつながり、同じく組曲「QUIT30」を構成する「Entrance Of The Earth」が始まります。このパートの終盤に含まれるメロディが音の記憶を呼び起こします。前回のツアー「TM NETWORK 30th 1984～ the beginning of the end」の中で使われた、曲と曲の間で流されたインストゥルメンタルのメロディが聞こえます。

組曲「QUIT30」のサウンドは全体としてロック系にカテゴライズできますが、その中で「Entrance Of The Earth」が鳴らすエレクトロ系の音は異彩を放ちます。四つ打ちの上に乗ってループするシンセサイザーの音は、ハウス・ミュージックが持つ中毒性を感じさせます。ライブでは鋭く響くシンセサイザーの音が重なり、明滅する光とともにシャープな印象を与えます。ここだけ切り取れば、巨大なスタジアムで観客を熱狂させるEDMにもなり得ます。

発展の象徴である高層ビルが建ち並ぶ都市部を抜け、すぐそこに存在するスラム街を歩く。表と裏、光と影。相反する要素はどこか遠くにあるのではなく、すぐ近くにあり、時として自らの中に潜みます。潜伏者が調査するのは人間の営みです。急速な繁栄と引き換えに矛盾を抱え込む都市を、そこに生きる人間の姿を介して記録します。功罪を問わず、そこにある出来事を俯瞰するように観察して、記録する。

潜伏者はバトンを手にして歩き去ります。この都市に姿を見せたのは、別の潜伏者からバトンを受け取るためでしょうか。そのバトンは、次はどこに向かうのでしょうか。動き出した潜伏者は何も語らず、その行動から意図を読み取ることもできません。迷いを見せることなく、どこかを目指して歩を進める、その背中を我々はただ見送ります。

## THE POINT OF LOVERS' NIGHT/SELF CONTROL/LOUD

---

粘り気のあるキック、赤と青が絡みつくライティング、扇情的に鳴るエレクトリック・ギター。ステージは眠らない夜の一部を切り取ります。ミディアム・テンポの中、重く分厚い音で演奏される曲は「THE POINT OF LOVERS' NIGHT」です。シンセサイザーの音も重なり、ギターとのアンサンブルが夜の闇を一際濃くします。スネアを抜いてキックとベースを中心に構築されたリズムは、光の陰に消えていく誰かと誰かのシルエットを浮かび上がらせます。

「THE POINT OF LOVERS' NIGHT」は1990年にシングルとしてリリースされ、オリジナル・アルバム『RHYTHM RED』にも収録されました。このアルバムを発表する前、TM NETWORKは名称をTMNと変えます。『RHYTHM RED』は音を大幅にロックに寄せており、デビューから変遷してきたTM NETWORKのサウンドの中でも、これだけの変化は突然変異と言っても過言ではありません。TMNとはただの改称ではなく、TM NETWORKの存在理由すら変えてしまう出来事でした。このアクションを彼らは「リニューアル」と呼び、グループの大きなターニング・ポイントになりました。

リニューアルによって、TM NETWORKはフィクショナルな存在から、生身の人間らしさを表出するスタイルにシフトしたと言えます。1991年のアルバム『EXPO』を含め、この時期に漂っていた色気は尋常ではありません。サウンドやメロディは、爽やかというよりは、艶があったり陰を感じたりするものが多くを占めていたし、歌詞やライブのパフォーマンスはフィジカルな魅力に満ちていました。これらは当時の年齢だからこそ出せた魅力とも言えます。二十五年ほどの時間が経った今回のライブでは、当時とは異なる、重ねた時間が醸す色気がウツから感じられました。「THE POINT OF LOVERS' NIGHT」で見せたマイクスタンドを操るパフォーマンスは実に躍動的であり、視覚的に鮮やかです。ロック・ボーカリストとしてのカリスマ性を全身から放ちます。

イントロやサビで鳴り響くフレーズは、今回のアレンジの特徴ですね。「THE POINT OF LOVERS' NIGHT」のオリジナルで使ったフレーズの一部を切り取り、ループしています。イントロではギターが前に、サビではシンセサイザーが前に出て、この印象的なフレーズを奏でる。重みのあるキックを土台にして、泣かせるフレーズのリフレインが観客の心を揺さぶります。最後はドラマチックに音が絡み合っ、厚くなり、膨張し切ったところで弾けるように終わります。弾け飛んだNord Lead 3の音がノイジーに鳴り続けます。やがて異なる雰囲気ベースが混ざり、次第にテンポが上がって、四つ打ちのリズムが走り始めると「SELF CONTROL」が始まります。

キックの勢いに乗って飛び出すシンセサイザーのリフが、観客のボルテージをぐんぐん上げます。1987年にリリースされた曲ですが、2014年のライブでは音が厚みを増しています。1980年代の曲を2014年の音と声でアップデートしたアルバム『DRESS2』に収録されており、シンセサイザーのリフも厚みのある音で再構築されています。発表直後に行なわれた前回のツアー「TM NETWORK 30th 1984～ the beginning of the end」に続き、『DRESS2』の音を下敷きにしたエレクトロ系のアレンジを今回のツアーも踏襲しています。

キャッチーなリフは、ステージも観客席もまるごと興奮の渦に呑み込みます。小室さんも真っ

赤なショルダーキーボードを下げ、右に左にステージを移動し、鍵盤を叩き、観客を煽ります。今回のライブの特徴は、いくつかの曲でキーボードの要塞を飛び出し、観客に近づいていたことですね。さすがにショルダーキーボードを破壊することはなかったものの、「SELF CONTROL」ではステージを飛び出して、観客の手の届きそうなところまで来ており、躍動感にあふれていました。「TM NETWORK 30th 1984～QUIT30」は客席との距離が近い印象があります。

「SELF CONTROL」の歌詞が綴るのは「自分を縛るものからの解放」です。「セルフ・コントロール」は大人として必要な機能ですが、それに縛られ過ぎる、あるいは縛られ続けることで抑圧され、自分自身を表現できなくなります。この曲名を表題にしたアルバムを1987年に発表したとき、TM NETWORKは「自分たちの音楽で、聴く人それぞれのセルフ・コントロールから解放つ」という趣旨のステートメントを歌詞カードに記しました。

セルフ・コントロールこそが人間たる所以なのかもしれませんが、自縄自縛のようなコントロールを自ら打ち破る力もまた人間らしさと言えます。四六時中解放を謳うわけにはいかないにしても、致命的につぶれる前に気持ちの発露はあった方がいい。続いて演奏された「LOUD」は2014年にリリースされましたが、もっとエモーショナルでいい、と歌います。自分が持っているもの、抑えているものを表出しようじゃないか、と。若手として駆け抜けた1980年代の気持ちとは異なっていたとしても、大人になって言い切れないことが増えたとしても、それでもエモーショナルに叫ぶことは悪いことじゃない、という結論に達したのかもしれない。

「LOUD」には、盛り上がるポイントがいくつもあり、ダイナミックな起伏のサイクルを見せます。終盤には♪LOUD LOUD, LOUD♪と繰り返しシンガロングするところで、盛り上がりは最高潮に達します。ウツがメロディに合わせて観客席のあちこちを指差し、観客は呼応します。今回のライブではこの部分の尺が倍になり、シンガロングを繰り返すほどに気持ちが解放されていきます。

2012年の夏には「LOUD」の原型はできていて、当時、限られた数の潜伏者が「35.664319, 139.697753」に集まり、デモ音源を聴くことができました。一年を超える潜伏期間を経てアレンジも変わり、2014年にシングルとして世に出ます。この曲のリリースによって、三年に渡るプロジェクトにおける最後の一年の幕が開きました。ミュージック・ビデオは宇宙船の内部をイメージしたセットで撮影され、そのコンセプトはそのまま「TM NETWORK 30th 1984～ the beginning of the end」に受け継がれました。その後、アルバム『QUIT30』にはスネアを強調したミックスが収録されています。

「LOUD」は変化し続けます。過去の曲だけでなく、比較的新しい曲もアレンジを変えていくのがTM NETWORKです。アウトロが追加され、テーマとも言うべきメインのフレーズが繰り返されます。小室さんはVirus Indigo 2 Redbackでテーマ・メロディを弾きます。濃紺の筐体に包まれたアナログ・シンセサイザー。音を視覚化できるとすれば、ビームのような光の束が放射状に伸びる感じでしょうか。小室さんの指が鍵盤を叩くたび、太い音が放出されて聴き手を貫きます。この太くて厚い音は、ロックに欠かせないエレクトリック・ギターやスネアに匹敵するプレゼンスを示します。

## QUIT30 PART5: The Beginning Of The End II/The Beginning Of The End III

---

潜伏者のひとは「キャロル」に向かって、君には特別な力がある、と言いました。太陽が昇る音が聞こえる。月の石が鳴る音が聞こえる。「キャロル」は「潜伏者たちが集めたピースをつなぎ合わせてみましょう」と語りかけます。潜伏者たちにも特別な力があります。それは創造力（creation）であり、情熱（concentration）、そして想像力（imagination）。「キャロル」は言葉を継ぎます。あなたたちにも特別な力があります。それを目覚めさせるものこそ、音楽なのです。それを忘れないように。そして最後に "Good luck." と口にして、このライブにおける「キャロル」の役割は終わります。

三人の潜伏者が集結します。ひとは、白地に黒い線で模様が描かれたTシャツ、ダークグレーとグレーが組み合わさったジャケットを着て、サングラスをかけている。ひとはダークグレーのネクタイを締め、濃いネイビーのスーツに身を包み、いつものサングラスをかけている。そして、もうひとは赤を基調としたブルゾンを着て、髪をなでつけて額を出し、少し大きめの濃い色のサングラスをかけている。

スネアの音がトリガーとなって「The Beginning Of The End II」の演奏が始まります。このパートは組曲「QUIT30」の終幕の開始を意味します。組曲の前半パートで使った言葉を集めて、新たな言葉と組み合わせて歌います。深く沈み込むベースの音と輝きを放つシーケンス・サウンドが背中を押すように曲を進めます。音が積み重なるにつれ、物語のエンディングに近づきます。

今回のライブのために制作されたTM NETWORKのロゴの中で、「O」を示す文字は、電源マークを模しています。このロゴがスクリーンに映し出されると、「The Beginning Of The End II」の収束とともに電源マークが緑色に光り、ゆっくりと点滅します。曲は切れ目なく、組曲「QUIT30」の最後に位置するパート「The Beginning Of The End III」にシフトします。記録されたソフト・シンセやベースの音、女性のコーラスとともに、エレクトリック・ギターとドラムがリアルタイムに音を刻みます。

やがて電源マークの色が切り替わり、赤い光を放ち始めます。三人の潜伏者が集まって、いくつかの言葉を交わします。ダイナミックに上下動するサウンドは物語の背景と化して、「TM NETWORK 30th～1984 QUIT30」のエピローグが進行するのを見守ります。

ひとは他の潜伏者に向けて小さくうなずいてみせると、その場を去ります。潜伏者は港のそばに建つバーに入ります。客のいない真昼の店で、店主と何事かを話しています。ここの店主も潜伏者の活動に関わっているのでしょうか。それとも潜伏者が表の顔として築き上げてきた関係を示すものなのでしょうか。やがて潜伏者はスツールを立ち、ドアを開けて外の世界に踏み出します。ギターケースを下げ、空を見上げています。サングラスの奥から何を見ているのか。空を、そしてその先を見つめているのか。この潜伏者はロック・ミュージシャンとして潜伏し続けているのかもしれませんが。

もうひとりの潜伏者が歩き去ります。目の前にバトンが転がっています。三十年間のTM NETWORKによる調査活動の中で行き来したバトンを、潜伏者は拾います。車の運転席に乗り込むと、アクセルを踏み、夜の道を進んでいきます。やがて車を止め、おもむろにノートパソコン

のような装置を起動させます。真っ暗なモニターに白い文字で表示されたのは "Next mission is commanded." という文字列。この潜伏者はどこかの企業で真面目に勤務するサラリーマンの顔を持ちながら調査を続け、いつか駅のプラットフォームで少女から音を手渡されることでしょう。

最後に、その場に残っていた潜伏者が姿を消します。人と物がひしめく建物の中を歩きます。アジアらしい混沌とした雰囲気醸す、どこかのバザール。売り物にあふれる狭い通路や物置のような一帯を通り抜け、人々をかわして前に進みます。何かを探しているのか、誰かを探しているのか。行くべき場所はすでにプログラムされているのか、あるいはそのプログラムを無視して進んでいるのか。潜伏者の歩みは止まりません。その背中を追うのが精一杯ですが、人気のない角を曲がった途端、潜伏者の姿はどこにも見えなくなります。忽然と、消えたかのように。

黒地に白抜きの線で描かれた世界地図が目の前に広がります。三つの電源マークが地図の上で赤く光ります。ひとつはニューヨーク、もうひとつはジャカルタのあたりで光ります。そして、残るひとつの電源マークが光っているのが、ロンドン。この古都に、TM NETWORKの物語を語る上で欠かせない人物がいます。その人物を迎えて、TM NETWORKストーリーは最後の章を迎えます。増え続ける大量のデータとともに、物語の舞台はロンドンに移ります。

Investigation Report 4 for QUIT30

2015年11月16日 発行

著者 : FJK

<http://inthecube.exblog.jp/>

<https://note.mu/iamfjk>

